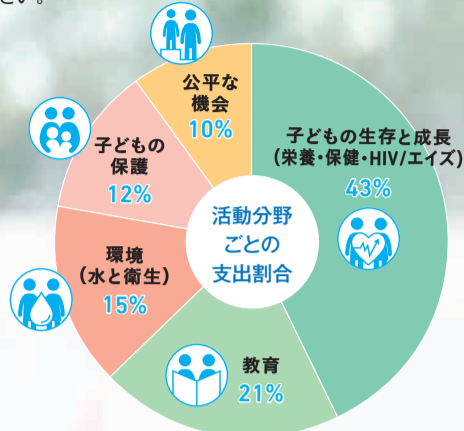


皆さまからのご寄付が 子どもたちの大きな支えとなっています

ユニセフの総収入の内、23%が世界中の民間の皆さまから寄せられたご寄付でした。活動分野ごとの支出(合計84億5,700万米ドル)の内訳は下記をご覧ください。



*割合は四捨五入しているため、合計が100%になりません。(2023年度実績)

ユニセフと各国ユニセフ協会(ユニセフ国内委員会)

ユニセフ(国際連合児童基金)は、世界中のすべての子どもたちが健やかに育ち、持って生まれた可能性を十分に伸ばすことができる世界の実現を目指す国連機関です。国連予算の配分は受けず、子どもたちのための支援は、皆さまからのご寄付と各国政府などからの任意の拠出金に支えられています。また、世界33の先進国・地域には、民間におけるユニセフ支援の公式窓口であるユニセフ協会が置かれており、ユニセフとの協力協定に基づき、ユニセフを支える募金活動、ユニセフや世界の子どもたちの広報活動、子どもの権利の実現を目指して行うアドボカシー(政策提言)活動に取り組んでいます。



各国ユニセフ協会における国内事業も皆さまからのご寄付に支えられています。当協会の収支報告については「日本ユニセフ協会の活動」欄をご覧ください。

子どもたちのための あたたかいご寄付を お願い申し上げます

ユニセフ募金

●郵便局(ゆうちょ銀行)から

全国の郵便局(ゆうちょ銀行)からお振込みいただけます。窓口をご利用の場合、硬貨取扱料金を含む振込手数料が免除されます。

振替口座:00190-5-31000

口座名義:公益財団法人 日本ユニセフ協会

●インターネットから

パソコン・スマートフォン(www.unicef.or.jp)からクレジットカード、コンビニ支払い、Amazon Pay、携帯キャリア決済、インターネットバンキングでご寄付いただけます。



ユニセフ・マンスリーサポート・プログラム

毎月ご任意の一定額を金融機関(銀行・信用金庫・ゆうちょ銀行等)の口座、またはクレジットカード決済による自動引き落としでご寄付いただく「ユニセフ・マンスリーサポート・プログラム」にぜひご参加ください。世界の子どもたちの状況やユニセフの支援活動についてご報告する広報誌「ユニセフニュース」(年4回発行)をお届けいたします。お申込みは当協会ホームページまたはフリーダイヤルへ。



*公益財団法人日本ユニセフ協会へのご寄付は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、法人税の控除対象となります。

「子どもの権利」を親子で学べるユニセフハウスへお越しください

「世界の子どもと出会う場所」ユニセフハウスは、さまざまな状況で生きている世界の子どもたちとの出会いを通じて、小さなお子様からおとなまで、子どもの権利について、感じ、学び、考えていただける展示施設です。(第17回キッズデザイン賞受賞)



アクセス JR・京浜急行 品川駅
または地下鉄都営浅草線 高輪台駅より徒歩7分

開館日・時間 平日と第2・第4土曜日10:00~17:00(祝日を除く)



各種SNSも
ぜひご覧ください



@unicefinjapan @UNICEFJapanNatCom @UNICEFinJapan

公益財団法人 日本ユニセフ協会(ユニセフ日本委員会)

〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス

フリーダイヤル:0120-88-1052(平日 9:00~17:00)

ホームページ: www.unicef.or.jp



世界の子どもたちへ
あたたかいご協力をありがとうございます



日本ユニセフ協会の活動

募金活動

当協会ホームページやダイレクトメールを通じた都度のご寄付に加えて、任意の一定額を毎月の自動引き落としでご寄付いただく「ユニセフ・マンスリーサポート・プログラム」へのご参加をお呼びかけしています。また、選択いただいた支援物資を子どもたちに届ける「ユニセフ支援ギフト」のほか、「ユニセフ遺産寄付プログラム」、「外国コイン募金」、ご自身でプロジェクトを立ち上げてご寄付を集めていただく「フレンドネーション」など様々な方法でご協力をお願いしています。都度のご寄付としては、紛争や災害などの緊急事態下の子どもたちの支援のための緊急・復興募金も受け付けています。「ウクライナ緊急募金」、「ガザ人道危機 緊急募金」、世界中で頻発する地震や洪水などの影響を受ける子どもたちのための「自然災害緊急募金」や、厳しい人道危機下にある子どもたちのための「人道危機緊急募金」などへのご協力をお呼びかけしています。さらに、皆さまにボランティアとして募金活動にご参加いただく「ユニセフ ハンド・イン・ハンド募金」を街頭およびオンラインで開催しました。

ご協力いただきました皆さまに心より御礼申し上げます



広報活動

世界約190の国と地域で展開するユニセフの活動や、貧困、災害、紛争などの要因で困難な状況に置かれている子どもたちのことを広く知っていただくために、プレスリリースやホームページ、SNS、資料、企画展示などを通じて情報発信を行っています。そして、子どもを取り巻く課題やユニセフの取り組みをより身近に感じていただけるよう、ユニセフ現地報告会や講演会、シンポジウムなども開催しています。また、子ども向けユニセフ学習資料の制作・配布、児童・生徒対象のユニセフ教室への講師派遣のほか、ユニセフ職員や各分野の専門家を講師に迎え、学生を対象とした国際協力講座を実施しています。

アドボカシー(政策提言)活動

子どもの権利の実現に向けて、様々な活動を実施しています。政策レベルでは「子どもの権利条約」の普及と実施のため、関係省庁と協力しています。学校現場では、子どもの権利の視点から学校生活を自己評価するアンケートを児童・生徒と教員に対し実施。この分析を行い、「子どもの権利を大切に教育」の推進につなげました。SDGs学習のための副教材やウェブサイト「SDGs CLUB」、「子どもの権利とスポーツの原則」の子ども向けサイト「こどスポ」も広く活用されています。子どもが主体のまちづくりを推進する「子どもにやさしいまちづくり事業(CFCI)」では、新たな自治体実践を始めるなど、全国で取り組みが広がっています。

子どものけんりプロジェクト

「子どもの権利条約」日本批准30年を記念し、子ども家庭庁と共催で子どもの権利の啓発普及キャンペーン「子どものけんりプロジェクト」をスタートしました。子どもからおとなまで、多くの皆さまに「子どもの権利」を知っていただくため、2030年3月までの間、様々な企画を展開していきます。2024年は、NHK Eテレの子ども番組を数多く制作しているNHKエデュケーショナルに知見を提供いただき、日本版のユニセフ「子どもの権利を大切に教育」用の教材を開発。NHK Eテレのアニメーション番組「アイラブミー」の主人公が歌うテーマソング「こえのうた」とともに、全国の幼稚園や小中高校などに展開しています。動画などは特設ページでご覧いただけます。

特設ページ
はこちら

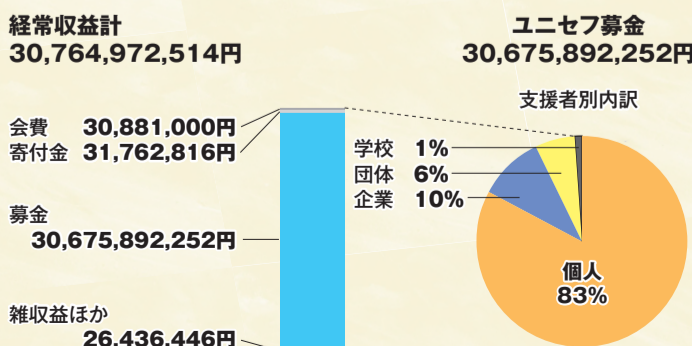


2023年度収支報告

皆さまからお預かりした募金総額の86.7%にあたる266億円をユニセフ本部に拠出しました。これは、各国のユニセフ協会と比較しても極めて高い拠出率・拠出額で、ユニセフが行う世界の子どもたちのための支援活動に大きく貢献しています。また、各国ユニセフ協会は、ユニセフとの協力協定に基づき、ご寄付の25%以内で、世界の子どもたちの状況をより多くの方に知っていただき、ユニセフ支援の輪を広げる国内事業を行っています。2023年度、当協会は募金総額の13.3%で国内での募金・広報・アドボカシー(政策提言)活動や国際協力に携わる人材育成活動などを実施しました。今後も効率的な事業推進に努めてまいります。



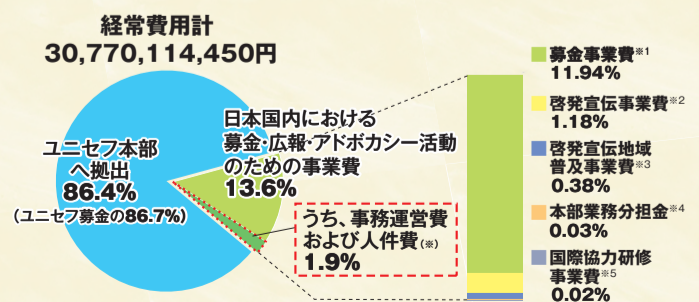
●収入内訳(公益目的事業会計)



詳しい財務諸表等は当協会ホームページで公開しております。なお、2024年度の収支は2025年4月に当協会ホームページなどでご報告予定です。



●支出内訳(公益目的事業会計)



* 新公益法人会計基準に則り、公益目的事業会計の各事業費に配賦されている、事務運営費(正味財産増減計算書の光熱水費、火災保険料、施設管理料、建物減価償却費、什器備品等減価償却費)及び人件費(給料・報酬、福利厚生費、退職給付費用、賞与引当金繰入額)。詳しくは正味財産増減計算書をご覧ください。

- *1 募金関連資料の作成・送付、領収書の作成・郵送料、募金の受領・領収書発行に伴う決済システムの維持管理、活動報告の作成など
- *2 「世界子供白書」「ユニセフ年次報告」などの刊行物の作成・配付、ホームページの作成・更新、現地報告会やセミナー、シンポジウム開催、広報・アドボカシーキャンペーンなどの費用
- *3 全国27の協定地域組織による広報・啓発活動関係費
- *4 ユニセフ本部と各国内委員会が共同で行う各種キャンペーンに対する分担金
- *5 国際協力に携わる人材育成にかかる費用

子どもたちへの成果

皆さまのご寄付で

子どもたちの笑顔と かけがえのない未来が守られています

環境(水と衛生)

ギニアビサウ

作ろう！私たちのトイレ



トイレの完成を楽しみにしているアスパさん(右)と姪のアルミンダさん(左)

ギニアビサウ西部のピオンボ地域の村で、赤ちゃんが重い下痢症で入院しました。原因は「村では屋外排泄が当たり前だから」。こう話す住民のアスパさんもトイレのある生活を経験したことはありません。

不衛生な環境では腸に炎症が起きやすく、栄養吸収が妨げられます。ギニアビサウでは、5歳未満児の4分の1が発育不良で、下痢症は5歳未満児死亡の主な原因です。ユニセフは政府と連携し、地域主導の衛生活動を推進していて、アスパさんも積極的に取り組んでいます。活動では、住民たちがそれぞれ排泄した場所を記録し、排泄物が生活環境に流れ込む経路を自分たちで地図にする研修を行います。この研修は低コストで実施でき、人々が自主的にトイレを設置する行動喚起につながることを期待されています。アスパさんは研修をきっかけに、1日も早く衛生的なトイレを作ろうと立ち上がりました。手洗い場を備えたトイレを二つ設置するため、近隣の家族と協力し日本円にして約1万円の費用を出し合いました。アスパさんの姪も「夜にトイレに行くときも、もうへびを怖がらなくて良いんです！」と、トイレの完成を心待ちにしています。アスパさんのお腹には8カ月になる赤ちゃんがいます。トイレは完成間近。アスパさんは生まれてくる我が子を衛生的な環境で迎えられる予定です。

教育

アフガニスタン

みんなで作る地域の「学校」



学校の友達とは新しい遊びを考えて遊ぶことが多いカディジャさん

「お父さんが文字を読むのを手伝っているの！」得意げに話すのは9歳のカディジャさん。彼女が暮らすアフガニスタンのダイクンディ県の村には学校がありません。カディジャさんは毎日、母親が家事をしながら話してくれる物語を聞いて過ごしていて、簡単な文章でも読んだり書いたりできませんでした。アフガニスタンでは370万人の子どもが学校に通っていません。学校は勉強だけでなく、心を育む場であり、児童労働や暴力、早すぎる結婚から子どもたちを守る場でもあります。ユニセフは学校の代替として地域主導の学習センターの設立と運営を支援しています。教材提供のほか、教員選出や、教員給与の支払いと財源の維持・管理方法などを住民に研修しています。現在国内にある1万7,974の学習センターには、約55万8,000人の子どもが通っています。その約64%が女の子で、カディジャさんもその一人。カディジャさんは初めての授業で、黒板に文字を書くという大役に誰よりも早く手を挙げ、見事にやっつけました。彼女は以前より活発でよく笑うようになりました。両親は「学校」に通うことで娘に起きた素晴らしい変化と成長に驚きながら、その将来をとっても楽しみにしています。カディジャさんは身を乗り出して言います。「勉強も友達と遊ぶのも楽しい！学校ってとっても楽しいところなのよ！」

公平な機会

パラグアイ

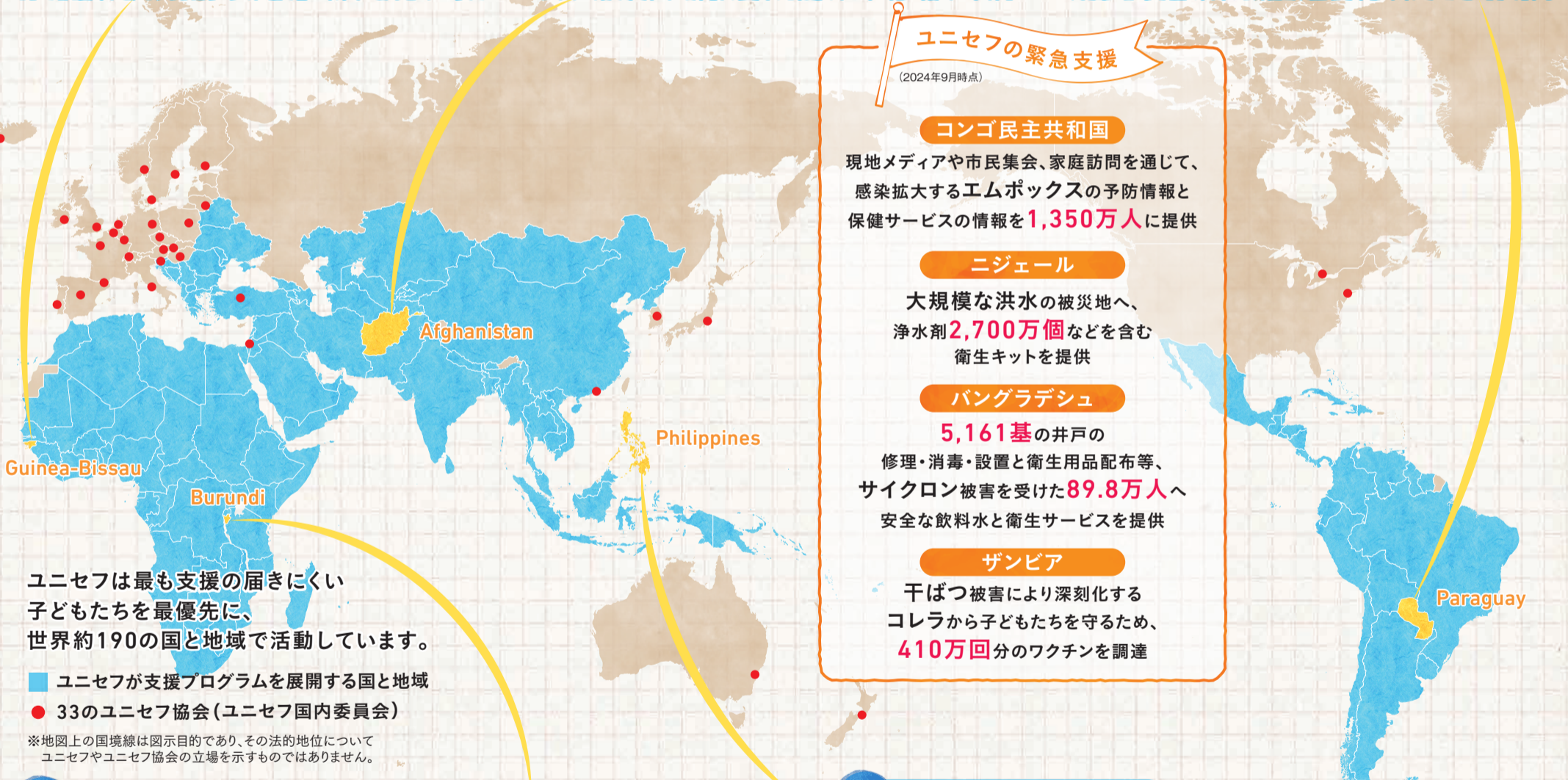
初めての学校 初めての勉強 初めての友達



クリスティーナさんの好きな教科は、国語と音楽

2024年2月、9歳で小学校に入学したクリスティーナさん。ポリオ(小児麻痺)を発症し、話すことや歩くことが難しい彼女の入学をサポートしたのは「学校へ行くプロジェクト」。スタッフが各家庭を訪問し、学校に通えていない子どもの就学を家族に促すほか、デジタル教材を学校へ提供するなどしています。スタッフは彼女と初めて会ったとき、入学は極めて難しいと感じました。「だからこそ私たちがサポートしなければと思いました」。連絡を受けた小学校では、早速クリスティーナさんに制服を贈り、デジタル教材の準備を始めました。担任のエリザベス先生はインクルーシブ教育*の豊富な知識と経験があります。家族や学校のサポートによって無事に入学したクリスティーナさんは、先生やクラスメイトと一緒に物語を聞き、体を動かし、歌を歌います。初めて友達ができたことで自分の気持ちを表現できるようになりました。「他の子どもたちも、言葉ではうまく伝えられない彼女を理解し寄り添っています」と、エリザベス先生は話します。クリスティーナさんの母親は、「娘は一人の人間として生きていける。その権利を手にしたことを実感しています」と、穏やかに話します。鳥を目で追い、草や葉の擦れ合う音を聞く通学時間も楽しみながら、クリスティーナさんは毎日休まず学校に通っています。

*多様性を尊重し、障がいの有無や人種、宗教、性別にかかわらず、すべての子どもが共に学ぶこと



子どもの保護

ブルンジ

ここで、胸を張って生きていける



息子の出生登録手続きを待つエメリンさん

保健医療サービスや教育を受けるために不可欠な出生登録。ブルンジでは、生後15日以内に届け出なければならず、期日を過ぎると手続きが複雑で費用もかかるため、いまま登録のない子どもたちが多くいます。キルンド州の登録率は2023年10月時点で国内で最低の34%。州で5歳未満の子どもが無償の予防接種を受けるためにも出生登録は必須です。

エメリンさんの息子は体の色素が薄いアルビノの症状があります。出生登録がないため病気になっても病院へ連れて行けませんでした。「私たちはお金がありません。それに、出生届を出したら息子を

取り上げられてしまうと思っていました」。状況を変えたのは新たに始まった出生の追登録支援プロジェクト。追登録にかかる財政支援と合わせて、住民登録と保健システムの連携を強化し、初めての予防接種時に出生登録もできるよう整備しました。息子の追登録を終えたエメリンさんは「これからは私たちも息子も、胸を張って生きていきます」と、ほっとした表情を見せます。システムの連携強化などが功を奏し、キルンド州では2023年6月1日から2024年6月15日の間に26万8,691人の子どもが出生登録を完了しました。すべての子どもたちの生存を保証し、不可欠な公共サービスを提供するという大きな目標達成に向け、ブルンジは着実に歩を進めています。

子どもの生存と成長

フィリピン

手から手へ 広がる予防接種の輪



訪問先で予防接種に対する人々の不安に耳を傾けるモハマドさん(左から2人目)

世界的な予防接種の取り組みで、ジフテリアや破傷風、百日咳など、子どもの命を脅かす病気が「予防できる病」になりました。しかし、新型コロナウイルス感染症のパンデミック後、多くの国で接種率は低下。ワクチンによる集団免疫の獲得には対象人口の95%が予防接種を完了する必要がありますが、医療関係者の力だけでは限界があります。フィリピン政府は、ミンダナオ島南西部でははしかの急増に、地域の生後6カ月から10歳の子どもを対象に予防接種キャンペーンを実施。ユニセフはワクチンの調達から、接種計画策定、投与まで広く支援しています。

子どものワクチン接種は、その家族が公共の保健システムを利用する第一歩にもなります。イスラム教徒が多く暮らすこの地域で予防接種への理解を促すため、保健当局は3,500人の宗教指導者に戸別訪問への協力を呼びかけました。協力者の一人、モハマドさんは各家庭を訪れ、保護者たちへ予防接種の重要性を説明します。「予防接種は多くの病気予防に最善の手段で、ワクチンはハラール*だと伝えていきます」。また、ミンダナオ州立大学の学生たちも啓発活動に取り組んでいます。児童養護施設を訪れ子どもたちと遊んだり食事の手伝いをしたりする際に、予防接種の大切さを伝えています。地域の人々の手から手へ、予防接種は広がっています。

*イスラム法において「許されたもの」を意味する